episode 28　みちこ 〜だいすきな わたしのフルート

投稿者　**嶋﨑 義和** さま（大分県）

『メロディ 〜だいすきな わたしのピアノ』
くすのきしげのり 作　森谷明子 絵
ヤマハミュージックメディア　2012年

ピアノである“メロディ”に語らせるストーリー、とてもやさしい気持ちになる絵本です。
私はピアノと共に、あわい恋心の思い出があります。小学校四年生の頃、クラスにかわいい女の子がいました。
その子のお父さんは転勤族で、地元の大手企業に勤めていました。私は、段違いの貧農の子でした。
その子の家に、友だちと一緒に行ったときに、外から黒いピアノが見えました。
その光景、豊かさにびっくりした思いと、高嶺の花を思い知った瞬間の記憶が蘇りました。
私は今、フルートを奏しています。楽器は、単なる木でも金属でもないと感じます。

奏者の思いと密接なつながりがあり、愛していると、それに応じた響きが出てきます。
「楽器を変えようかなー」と思っていると、なぜか不調になります。
浮気の思いに楽器がスネるのです。正直なものです。

私は十八歳の時に大病をし、退院後、“フルート”と天から降ってくるようなインスピレーションを得、
それからフルート三昧の日々になりました。
仕事で途中、二十六年間の休止期間もありましたが、今、演奏活動を再開。
最新のフルートは妻に出資してもらい、家内の名前をつけ“みちこフルート”と呼んで、毎日口づけをしています。
この絵本での記念日“ピアノが来た五月二十四日”は、
三人の子と孫たちからお祝いメッセージが届く、私たちの結婚記念日です。
絵本を六人の孫たちにも読んで聞かせました。
音楽の喜びが少しでも通じたらいいなと、思いを込めて朗読しました。
ピアノを弾いている孫たち、「音楽は世界の共通言語、異国の地にもたくさん友達をつくってほしい。
何にでも心が宿っていると思って、物を大切にするやさしい子に育ってほしい。
いい音楽を感じ取れる感性豊かな子になってほしい」と。

最後のページ「このピアノも　わたしのことが　だいすきみたい！！」ここを読むと、涙ぐんでしまいます。
私もフルートから愛されていると思うからです。

「絵本の日アワードin FUKUOKA 2023」投稿作品より

本連載は「医療法人元気が湧く」が主催する“絵本の日アワード”に応募された作品を掲載していきます。毎年、300〜450編の応募がある「絵本にまつわるエピソード」の作品から、「絵本の魅力」と「絵本のチカラ」のつまったエピソードを選び、その魅力と感動を読者の方々にも共有していただきたいと願って、投稿者の了解を得て紹介しています。
さらに、人に影響を及ぼした絵本のバックグラウンドについて、司書の専門的な視点による解説を加え、一冊の絵本をある部分では“深く”、そしてある部分では“広く”、興味を広げていただきたいと企画しました。

小学校の先生、絵本作家に転職する

わたしは「メロディ」。せかいで いちだいだけの なまえのあるピアノ。

この作品の主人公はメロディという名の、感情をもったピアノです。そんな物語を奏でたのは、26年間小学校教諭に従事していた、くすのきしげのり氏です。50歳を目前に教師を辞めて、絵本作家に転身しました。教え子たちにいつも、「自分にしかできないことをやりなさい」と言ってきたことを、自身で実践したのです。

その原体験は、くすのき氏の高校時代にあります。文芸部の部長になり、文化祭でつくった部誌の広告集めや販促活動に駆けまわった体験から、本をつくってそれを読者に届けるまでの一連の流れをおもしろいと思うようになったのでした。

教師時代は、道徳や国語の教材として活用するために作品を書き続けていたのですが、教育教材としてではなく、読者の心に窓を開けるような、「物語る力」のある作品を創りたいとの熱意をもって、創作活動の目的を絞り込んだのです。

音楽記号を巧みに使ったトリック

子どもや大人を主人公とする等身大の人間模様を描いた著作が多いなか、ピアノが主役の本作は、ひときわ目を引きます。この主人公のピアノは、くすのき邸に友人から譲り受けたヤマハ製がモデルになっているのです。そして、紡いだ物語を「ぜひ、ヤマハに出版してほしい」という作者の熱いオファーが叶い、ヤマハミュージックメディアより出版された絵本なのです。

作者のピアノ愛は、絵本の端々にこめられています。通常、絵本のページ数は16、24、32ページと８の倍数で成り立ち、物語の場合、32ページ構成が一般的です。本作も、ページ付でいえば32ページなのですが、音楽記号によるトリックが仕組まれているのです。

32ページの末尾に、D.S.（ダルセーニョ）という記号が付されています。この箇所から目印の記号セーニョへ飛び（戻り）、そしてFine（フィーネ）で終わるというわけです。すると、32ページ仕立ての絵本を、36ページで読むことになるのです。なんとも粋な演出でしょう。もっとも、音楽の知識がない方には、説明がないと素通りしてしまうもったいなさもあります。

「想像する力」と「物語る力」

ピンク色の表紙があたたか味を増している初版『メロディ』の絵は、日本画家の森谷明子氏によるものです。日本古来の世界観を描く現代屏風や寺社奉納絵画で活躍する森谷氏のやわらかなトーンの絵は、ピアノの心の機微を丁寧に表現していて、「メロディ」の物語にやさしい空気をまとわせています。画家の森谷氏が、くすのき氏の創作活動に対する信念を理解し、共感したからこそ生まれた絵ではないでしょうか。

くすのき氏は、創作活動について、次のように語っています。「子どもに限らず大人であっても、動植物であっても、さらには無生物であっても、それぞれ、そこにどういう心の動きがあるか、想像をふくらませて書いていくのです」。

作者は、自宅にやってきたピアノに寄り添い、ピアノの気もちを想像して、魂を込めて創り上げたのです。どんなものにも、心があるというメッセージが伝わってくるのです。文と絵の美しい調和にメロディを奏でる絵本です。

長らく絶版となっていた本書は2024年２月、佐竹美保氏の絵による改訂版が出版されました。初版と改訂版ふたつの『メロディ』をお楽しみください。

文献

1）くすのきしげのり：メロディ～だいすきな わたしのピアノ，東京，ヤマハミュージックメディア p.32, 2012.
2）公文教育研究会ミーテ事務局：絵本作家インタビュー vol.155 絵本作家 くすのきしげのりさん，ミーテ HP https://mi-te.kumon.ne.jp/